

KOZMOS



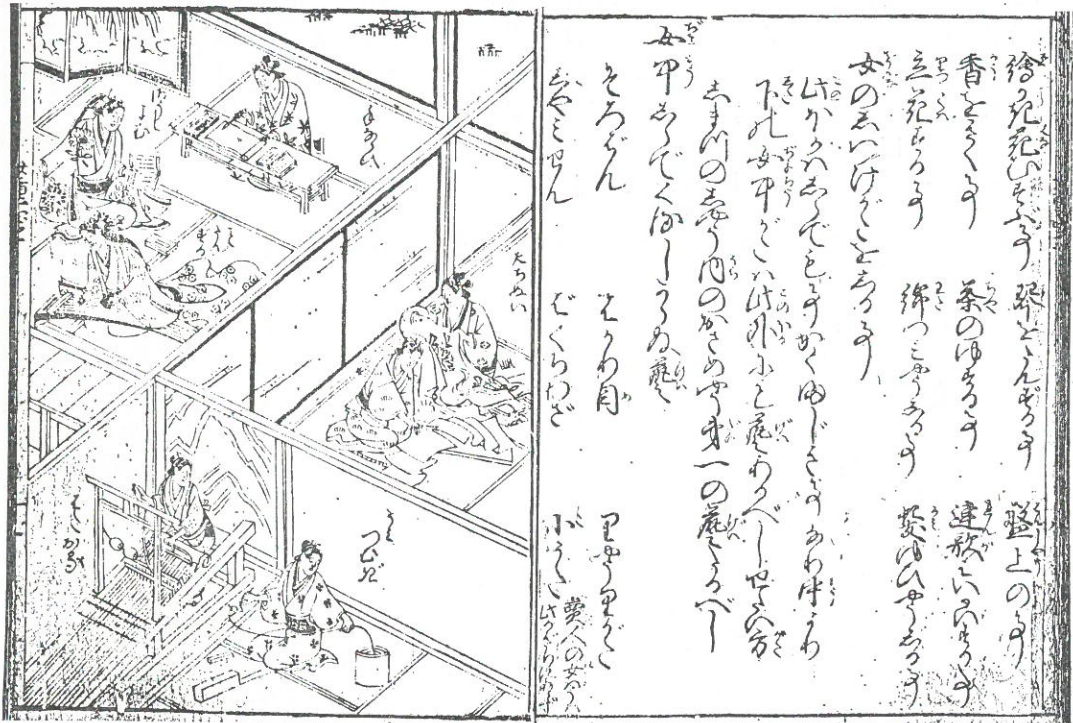
本学は1987年に100周年を迎えます

コスモス No. 71 1985 秋

特集

七転八倒, 嗚呼, 卒論

—絶好調, 真最中, 諦め, これから—



貴重書から

『西行一代記』

—寛文十三年松会版—

高城 功夫

『西行一代記』は、『西行物語』の版本の中で挿絵を伴って刊行された最初の書である。西行物語が版本として刊行されたのは、正保三年(1646)が最初で、次に刊記の明確なものが本書寛文十三年(1673)版である。

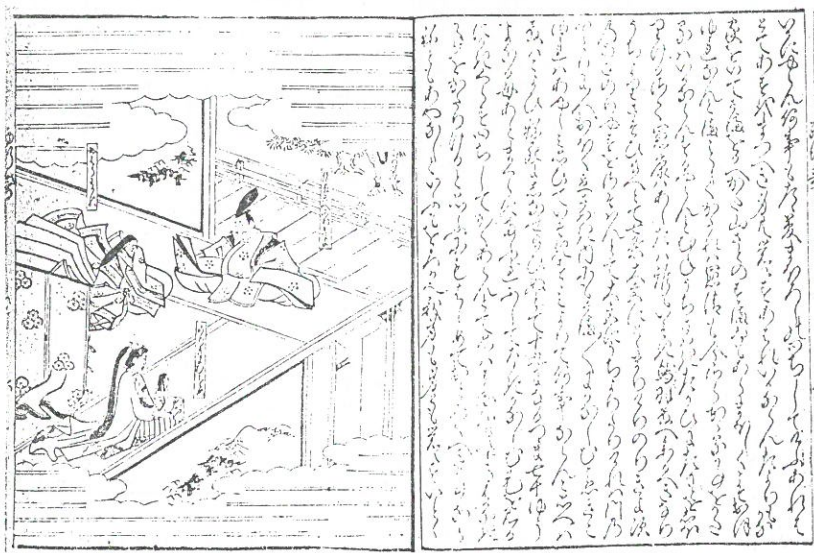
本学図書館蔵の『西行一代記』(貴-91)は、縦26.9糎、横18.6糎美濃判袋綴一冊本である。表紙は縹色綾型押模様で、題簽は左肩に「^入西行はなし合^上」(元表紙元題簽であるが「合^上」のみ墨書で後の補入)とあるが、もともと上・中・下三冊であったものを元題簽元表紙を利用した合冊である。内題に「西行一代記上(中・下)」とあるとおり、書名としては『西行一代記』と呼称すべきであるが、正保三年版西行物語と本文が一致するので、西行物語の改題本と言える。従って西行物語の本文系統上は、略本系になる。上巻12丁、中巻9丁、下巻11丁で、各巻3箇所に一面乃至二面大の挿絵がある。匡郭は四周単辺、本文行数は一面15行、一行22・3字詰め、柱刻は「西行哥(丁数)」

となっている。刊記は、下巻終丁裏に「寛文十三年歳月吉旦 松会開板」とある。本書は、寛文十三年刊初刷初版である。蔵書印は上巻首に「残花書屋」(戸川残花旧蔵)、「東洋大学図書館蔵」、下巻尾に「宝南」(すべて朱陽印)がある。かつて「弘文莊待賈古書目」27号(昭31・7)に掲載された「西行はなし」が本書のようである。

松会版とは、松会朔旦が江戸で専ら初期浮世絵師菱川師宣の絵本を刊行した版元書肆であって、松会版の絵は、師宣の版下真筆であることが多い。弘文莊書目の解説によると、「無署名ながら師宣の初期の作なる事確実、描線が生き生きとして強く精彩に富み」と記されている。寛文十三年は師宣43歳にあたる。師宣絵本で確実な刊年記の存するものは、寛文十二年刊『武家百人一首』であるから、師宣の早い時期の作と言える。

国書総目録の「西行一代記」の項に寛文十三年版は未掲載(延宝元年版は僅かに存する)であるので、稀覯本と言えるし、師宣の初期の作品を知る上でも貴重な一本と言えるであろう。なお西行物語の内容については、講談社学術文庫などを参照されたい。掲出の図版は、俗名佐藤義清(西行)が出家の志を抱き、妻子との別離に際して、後世の因果をふくめ一蓮託生の契りを結ぶ所の挿絵と友人憲康の急死を語る文である。

(文学部助教 たかぎ・いさお)



特 集

七転八倒、嗚呼、卒論

あなたの卒業論文の作成は、無事進行中であらうか。締め切り近くになって、青ざめた顔で図書館に飛込んでくる人がいる。先生、先輩のことは、同級生の様子。さあ、あなたも、もうひといき、頑張ってください。

卒論一ひとつの挑戦として

広 瀬 英 彦

大学には卒業論文というものがある。これを書かないと卒業できない学部や、選択科目としていところなど、学問の特色などによって制度に差異はあるが、卒論が、大学での教育課程のなかで小さからぬ位置を占めていることは、間違いがない。

では、学生はなぜ卒論を書くことが求められているのだろうか。それにはさまざまな理由があると思われる。人により意見の異なる点もあるが、私はつぎのように考えている。

第1に、卒論は4年間の学業の総決算となるからである。学生はすべていずれかの学部・に所属しているから、法学、経済学、社会学、文学など一定の範囲内での学問を専攻することになるが、それでもその内容は多岐にわたり、まことに幅広い問題領域を含んでいる。卒論を書こうとする学生は、それらの多様な問題領域のなかから、ひとつの課題を設定し、それまでに身につけた学問的蓄積のすべてを傾注し、不足している点はみずからおぎないながら、ひとつの学術論文をまとめあげる。そこには、4年間の勉学の成果が凝集されている。その意味で卒論は、学生時代の研鑽の到達点を記す貴重な記念碑となるはずである。

第2に卒論は、自己の知的能力を総動員する最適の機会となるからである。大部の卒論をまとめあげるには、問題発見力、論理的展開力、構成力、創造力など多様な能力が必要とされる。それらの能力のすべてを、ひとつの課題の達成に向けて収斂させていく体験を通じ、みずからの潜在能力の総体を自己認識することができる。それは将来の自信につながっていく。

そして第3に、卒論は、学生の主体的・能動的な研究を要求するものだからである。大学は、高校までと違って自主的に勉強し研究するところだといわれたりするが、実際には受け身の学習だけで終始してしまう場合が大方でもある。だが卒論だけは、自分で能動的に取り組んでいかなくては、何も進まない。だから卒論を書き上げたときは、「やったぞ」という深い満足感にひたるものである。「みずからこれだけのものをまとめた」という体験は、十分求めるに価する。

では、卒論をなぜ書くかはわかったとして、どう書くのか。それは数学の問題を解くのと同じだ、と私は思う。ただ、卒論の場合は自分で問題を定めねばならない。それも、簡単に答えの出せるありきたりの問題ではなく、独自の課題を設定することが必要である。その意味で、問題を立てるためにまず勉強し問題意識を育てねばならない。

こうして問題を立てたら、それを解いていく。それも、ただ答えはこうだと簡単に片づけてしまうのではなく、そうであるゆえんを他の研究成果や事実などをもって十分に証明していくのである。その証明が、遺漏のない論理展開と実体的裏付けをもってゆるぎなく構築されたとき、それはすぐれた「論文」となるのである。

——と、いろいろ固苦しいことを並べたが、なにはともあれ、卒論を書いてみることをお勧めする。『大学生ひとなみ講座』などという本には「論述のコツ」として「量だけはだれにでも書けるのだ」とあるが、それとて50枚、100枚となると、なかなか容易なことではない。とにもかくにも学生生活のしめくくりとして卒業論文を書いたということ。その意味は、君にとって決して小さくないはずである。ひとつトライしてみてはいかが。

(社会学部長 ひろせ・ひでこ)

卒論について思う

安 井 弘 人
小 幡 三津雄
小 菅 且 始

今回、上原教授から研究室内で、現段階で、ある程度の実験結果が出ているということで、僕達がこの文章を任されたわけだが、何分、理系の人間なので国語力がなく、うまい文章は書けないと思うが、とりあえず書くことにする。

それではまず、簡単に研究室の配属について説明しようと思う。

各研究室への配属は、三年生の終りに希望をとり、そして、各研究室に配属後、その研究室でいくつかのテーマから自分のやりたい事を選ぶシステムになっている。そんな中で、僕達三人は『セラミックスの加熱切削』と、いうテーマで研究を進めることになった。

この研究の目的は次の通りである。

セラミックスは現在、切削には適さず、研削加工が主流となっているが、この方法ではコストや加工時間などの面で無駄が多いので、もし、これが別の方法で加工できればこの無駄は大きく短縮できるはずである。そこで僕達は加熱する事によってうまく切削できないかという事を目的としている。

セラミックスは、『第三の材料』と呼ばれるように今後、いろいろな分野での利用が期待されており、いわば最先端の事について研究ができるというわけで、三人共、研究に賭ける意気込みは、かなりのものだった。しかし、この意気込みとは裏腹に、初めのうちは、いろいろ失敗があった。

例えば、チャッキングや、加熱の要領などがわからず、ガンガン高価なセラミックスを壊してしまい、とにかく切削どころではなかった。

一時は、あまりの先行きの暗さに頭が痛くなる毎日だった。また、アセチレンガスバーナーによって、回転しているセラミックスを千数百度に加熱しているので身の危険も感じた。

しかし、最近では、チャッキングやバーナーによる温度調節、非接触型温度計による温度測定など、三人共、神技？に近い腕前になったので、以前のような失敗は、かなり少なくなった。

その結果、現時点でクラシックなセラミックス（ムライト）について、切削抵抗、切削面の表面粗さ、工具磨耗などの予定していたデータが、ある程度まとまった。

このように、とりあえず一段落したわけであるが、今までの事を振り返ってみると、この卒業研究から得る物は大きいと思う。

一、二、三年生の頃は、大学はなんとなく高校の延長といった感じが強かったが、四年生になって卒論に取りかかってから、とても充実している。

やはり、自分のやりたい事を自分の手でやっていく所に、やりがいを感じているからだろうと思う。また、チームワークという面でも、いろいろ考えさせられた。こういう研究をしていると、一緒にやっている相棒とのコミュニケーションがうまく行っているか、うまく行っていないかが結果にも影響すると思う。

また、三人の内の誰か一人が抜けていても研究に支障がないようなチームではダメで、誰か一人でも欠けたら研究が進まないといったように、一人一人が存在感を持つ事が大事であると感じた。

そして、このことは、これから社会人となる僕達にとってとても大切な事だと思う。

以上、いろいろ述べてみたが、これからも前半同様、後半もガッツを出してやっけて行こうと思う。

なにしろ後半の研究に用いるセラミックスは、ニューセラミックスという物で、前半に用いた物よりも数段硬く、加工も難しいようなので、カベにぶつかることも多くなると思うが、三人で協力して、また、上原教授や、竹下先生に助けていたきながら、研究を成功させたいと思う。

(工学部機械工学科4年 やすい・ひろと おばた・みつお こすげ・かつし)

卒論作成過程に思うこと

野 津 雅 史

卒論提出を間近にひかえ、未だに確信ある答えを用意できない私が、卒論について述べるのもおこがましいが、今までの経験から思うことを述べて、願わくは後輩諸君の一助としたい。

卒論に限らずとも、物事を論述しようとするとき、必要になるのは対象の正しい認識である。しごく当然のことと思われるだろう。しかし、《正しい認識》がいかに促えにくいものか、卒論作成途上で何度もこの現実と直面するのが私の現状である。もしかしたら、正しい認識などできぬのかも知れない。それでも限りなく近づいてみたいと思う。その過程が、実はまた《学ぶ》ことでもある。

3年の5月、先生が「《学》とは何か。一言で述べよ」と我々に問われた。誰も答えぬのを見て「批判的に見るんじゃないかな」とおっしゃった。私が、中国西南部の少数民族史に本腰を入れ始めたのは、この頃だったと思う。もうひとつの中国史とも言うべき少数民族の歴史を通すことによって、あの空間的大国のまとまりの一因がわかると考えたのである。当時は、この程度で教科書的中国史を批判したつもりでいたから、先生の「批判的に見る」という言葉が妙に印象深く残っている。実は、先生は社会学とか歴史学とか言う場合の《学》について説明されたのだが、《学ぶ》こととも大差ないと思っている。つまり、学

ぶことと、批判的に見ることは不可分ではないか。

批判的に見ることは、問題意識を持つこととも言える。これは、ひとつの見方・事象に、他の見方を用意することになるが、資料が少ない場合、つき進めて行くうちに懐疑論的世界に陥ることがある。まったくブラックボックスで、ここから何が出て来るかわからない。この克服には、とにかく読んで考えることしかないだろう。私の場合、扱う事象が特殊とも言えるので、文化人類学者の報告や考え方も読書の対象としている。一民族について、歴史家と文化人類学者とでは当然見方が違うから、興味は湧くしヒントも得る。また、蛇足ながら付け加えると、こうしたつきつめた所で摸索することが、学祖井上円了の「諸学の基礎は哲学にあり」の真意ではないかと思っている。

マルクスは、大工と蜜蜂との違いは、前者は設計してから家を建て、後者は本能によって巣をつくることにあるとしているという。文章を書くことは、大工が家を設計するのと同じではないか。設計にあたって、材料、時間の知識と共に構想力が不可欠となるように、卒論を書くにも、資料、時間ともうひとつ、着眼点が必要である。資料の探し方については2年の内に会得しておくべきだろうし、教育実習を予定する人はそれを念頭に計画を練るべきだろう。重要なのは着眼点である。インスピレーションとしてもよからうが、卒論の出来、不出来の重大な問題だ。これは何もない所に発現するはずはなく、精出して調べ、批判し、思考する過程から生まれる。後輩諸君には、この過程を早くから経験し蓄積してもらいたい。

(文学部史学科4年 のつ・まさし)

論文・レポートの書き方に関する本

○知的生产の技術 梅棹忠夫著 1969 岩波新書
(002:UT)

○知的生活の方法(正・続) 渡部昇一著 1976・1979
講談社現代新書 (002:WS)

○文章表現の技術 植垣節也著 1979 講談社現代新書
(816.07:US)

○博士・修士・卒業論文の書き方 佐藤孝一著 1973
同文館 (816:SK-2)

○研究レポートのすすめ:卒論・ゼミ論のまとめ方
杉原四郎他著 1979 有斐閣新書 (816:SS)

○論文の書き方 沢田昭夫著 1977 講談社学術文庫
(816:SA-2)

○論文の書き方 清水幾太郎著 1959 岩波新書
(816:SI)

○学術論文の技法 斎藤孝著 1977 日本エディター
スクール出版部 (816:ST-2)

○論文の書き方:国語・国文学科学生のために 1959
至文堂 (816:R)

○英文科にいて卒業論文を書こうとする諸君諸嬢のために
島田謹二著 (白山英文学:卒業論文特集1)
1970 東洋大学白山英文学会 (Z097.93:T)

卒論の思い出

中川英子

このたび、卒業論文を書いた時の体験談を書くよう依頼があり、多くの院生の中から私が書く破目になった。通信教育部文学部国文学科の卒論を仕上げるため夢中で清書していた、丁度三年前のこの時期を思い出す。初めての事は何かと戸惑い、又新鮮な気持ちで取組むものである。失敗談を交えながら書いてみたいと思う。

三年生の秋、通信教育部の地方スクーリングが大阪で行われ、「西行物語」の演習と実地見学があった。それに参加し、西行ゆかりの「花の寺」など訪ねるうち、卒論は「西行物語」にしようとした。

四年生の五月、主査の先生に御指導を受けるまで約半年間は、西行に関した本や平安末期の時代を知るべく、それに関した本を集めて読んだり、図書館で資料をコピーしたりするのに当てた。

卒業論文を書くにあたっては、通信教育のテキスト「国語表現法」の中に神作光一先生の書かれた「論文執筆上の諸問題」という次の文章があった。

1. 論文を書く心得について
2. 題目提出から口述試問まで

この文章を繰り返し読んで、自分の勉強方法など間違わないよう心掛けたつもりである。六月七月を資料作りに当て、「西行物語」の出典配列比較表を作るこまかい作業を行った。八月は、その資料を基にして、原稿用紙に下書きする時期に当てた。論文の形式、体裁といったものを研究室にある、以前の優秀論文を見せて頂いて参考にした。出典を示しながらふたつの文章を比較するというひとつの型を見出すまで、何度も原稿用紙に書き直した。あるひとつのスタイルが整ったとき、これでまとめられるとほっとしたものである。あとは一気に下書きをした。八月末には下書きを先生にお見せして御指導を受けた。十月、十一月は不備な点を補いつつ清書の時期に当てた。そして十一月末製本に出すことが出来た。このような過程を経て、私にとって初めての論文が出来た。この間約一年、先生の懇切なる御指導を得て何とか

とめることが出来た。年が明けて二月、口述試問があって卒論に関しては一応終った。

次に失敗談。

何しろ長い文章を書くのは初めての経験である。十一月も半ば過ぎた頃、目が悪くなってきた。眼球が痛み、視力が衰えた。字がぼやけたり、二重になったりした。忘れもしない十一月二十三日清書を仕上げた時点でとうとう見えなくなった。最後に読み直して製本に出そうと思って、日数には余裕をもたせていたつもりであったが、大いにあわてた。疲れからと思えばらく様子をみて、視力が回復してから読み直そうと、一週間、卒論はそのままにしておいた。その間、長女（当時大学二年生）に無理に頼んで読んでもらい、誤字を指摘してもらった。この時ばかりは、娘の方が力があると感心したものである。そんなこんなするうち視力も戻ってきて、誤りを訂正して製本に出した。製本が仕上り十二月の初めなお読み直し点検していたら、最後の方で頁数が飛んでうってあった。又引用文の中で、旧字体と当用漢字とが入り交っているのがわかり、訂正して、提出期限の二日前十二月八日提出した。頁数にして五百頁を少し出た。

二月初め卒論の口述試問があった。大変厳しかった。私はすっかり上ってしまった。「上る」という精神状態はそれまで経験した記憶がない。学生時代は生徒会長、勤めては婦人部の書記、子どもが小学校にいた十二年間はPTAに関わり、最後にはPTA会長など柄にもなく、なり手がない役をやられ、人前で話すことは平気で、上ることを知らないずうずうしさが身についている。それなのにこの口述試問の第一問など精神状態が空になってしまい、うまく答えられなかった。十問位質問があり色々指摘された。今ふり返ると、ひとつの論文をまとめるのに多くの事を教えられたと思っている。

通学生の方は就職試験など重なり、二部の方は仕事をしながら、又通信生は遠く離れ孤独の中でそれぞれ卒論に取り組まれていることと思う。時間を上手に使い、最後には少し日数の余裕をとって提出期限には遅れないよう、健康に留意され頑張ってください。

（大学院国文学専攻博士前期課程 なかがわ・えいこ）

大橋文之

—哲学館の青春紀行—

明治31年、佐々木信綱によって創刊された『心の花』は、近代短歌の出発期にあって、新旧折衷主義にたち、新旧両派の緩衝地帯として重要な役割を果し、短歌雑誌では現在最も古い歴史を有します。その草創期の編集員の1人大橋文之は、哲学館の出身です。第4期生(23年度入学生)で、同期には安藤弘(京北実業学校長)がいます。境野哲(第4代東洋大学長)・河口懸海(仏教学者・探検家・著書『西藏旅行記』)は1期先輩、安藤正純(衆議院議員・国務大臣)は1期後輩です。

文之は、『心の花』が『詞林』と合同した第2巻第1号(32年1月)から大日本歌学会の発行を経て、竹柏会出版部の発行となる第7巻第3号(37年3月)まで編集に携わっています。『心の花』はもとも29年に発刊された竹柏園(竹柏会の前身)の回覧誌『いささ川』を継承発展させたものです。早くから信綱に師事していた文之は、すでに東久世通禧・鈴木重嶺・信綱・金子薫園・与謝野鉄幹・大町桂月・大塚楠緒子・石樽千亦・高崎正風らと『いささ川』の執筆陣に加わっています。

33年3月、子規庵で香取秀真・岡麓・山本鹿洲の3人が出席して短歌会が行なわれました。これが根岸短歌会のはじまりです。その際に秀真ら3名の正岡子規訪問のきっかけをつくったのが文之だといわれています。秀真の回想です。

明治32年の正月余は新年雑詠32首を作った。それを岡麓君、大橋文之君、山本鹿洲君の3人から新年の歌をもらひ受けて32番歌合せをこしらへた。誰かに判をしてもらひたい物だと思ふてみると、竹の里人がよからうといふ事を文之君が云ひ出した。そいつは面白いと云ふので有ったが、判をしてくれるかどうか分らない。マア行つて見るさといふので、山本鹿洲君が使番になっていった。帰つて来ての話に、直ぐ遇ふてくれてそして心よく歌合の判をしてくれる事を承諾されたとの事であった(『ホトトギス』第6巻第4号)。

文之は中央歌壇で活躍したばかりでなく、30年からは哲学館の機関誌『東洋哲学』文芸欄に信綱の協力を得て、竹柏園同人の中軸として出詠し「東洋大学歌壇」の最初期を担います。第9編第6号(35年6月)では選者をつとめました。歌題の「紫陽花」で地位に選している

大臣今政にうみてこもりますまど近うさけり
あじさゐのはな

は、哲学館教育部第2科1年正富由太郎(汪洋)の作品です。汪洋が、尾上柴舟(八郎・当時哲学館講師)・若山牧水・前田夕暮とともに車前草社をおこしたのは、その3年後の夏でした。

文之が明治歌壇に雄飛した30年代は、近代短歌の濫觴期です。文之は、生涯をとおして専門歌人の道を歩みませんでした。新旧両派の対立、新派同志の抗争、それに歌壇特有の複雑な人間関係のなかにあって、その半生を通じて後進に与えた影響は大きいといえましょう。

文之の歌は、のびやかでなだらかな調べをもついわゆる短歌らしい短歌として展開しています。歌集を著わすことを好まず1冊も刊行していませんが、現在判明している作品は、前掲『いささ川』・『心の花』・『東洋哲学』のほかに、『千代田歌集』・『明治歌集』・『征清歌集』・『やまとにしき』・『竹柏園集』・『くさふえ』等の歌集をはじめ、『新仏教』の文芸欄、新聞「日本」紙上に収録されているものです。小泉荻三(藤三・東洋大学大正6年卒業・立命館大学教授を経て『ポトナム』主宰)がその著作に文之の歌を紹介しています。

かしこきやわが大君のしるしめす天地のきは
み年たちにけり(『明治大正歌書綜覧』)

世の中のなにはの事はさもあらばあれ花にな
りゆく春の心よ(『現代短歌大系』第2巻)

乱れ咲く秋の八千草それながらちぶりの神に
花たてまつる(『近代短歌史』明治篇)

<大橋文之>

岡山県久米郡福渡町に生る。哲学館卒業。岡麓、香取秀真等と「鶯蛙吟社」を興した。後「心の華」と合同し『心の華』の編者の1人となる(『現代短歌大系』第2巻、河出書房、昭和27年)

図書館 あ・ら・かると

★ 白山だより ★

軽読書コーナーの開設について

9月27日より第3閲覧室に気軽に読める種類の本を集めて、「軽読書コーナー」が設置されました。

読書の楽しさを味わってほしいということで設けられました。まだ少数の図書しかありませんが今後順次増やしていく予定です。

このコーナーの図書は貸出しをいたしません。図書館内のみで利用して下さい。

また、意見や希望などがありましたら、館内備付けの投書箱にお寄せ下さい。

軽読書コーナーの本より

椎名誠『岳物語』、ケント・デリカット『英語は外人にまっかせなさい』、山田太一『ふぞろいな林檎たち』、林真理子『今夜も思い出し笑い』、『幸せになろうね』他、赤川次郎『知り過ぎた木々』、渡辺貞夫『ぼく自身のためのジャズ』、倉本聰『いつも音楽があった』、宮川一夫『カメラマン一代』。

甲南大学図書館よりお客様

10月4日甲南大学図書館よりお客様をお迎えいたしました。本館の視聴覚室業務、雑誌受入・管理業務を見学されるために来館されました。

★ 朝霞分館だより ★

千葉文庫が利用できるようになりました

本学理事長、社会学部長を歴任された、千葉雄次郎名誉教授の寄贈された図書が、千葉文庫のコーナーに置かれ、利用できるようになりました。

このたび利用できるようになったのは、第1回寄贈分の1,748冊（和書1,335冊、洋書413冊）で、

第2回寄贈分の543冊（和書256冊、洋書287冊）については、目下、整理が進行中です。整理終了したい、第1回分とあわせて、お目見えすることになります。

千葉文庫の内容は、先生の広汎な読書を示し、多方面にわたっていますが、とくに、社会学関係、なかでもマス・コミュニケーション、ジャーナリズムに関する本が多くふくまれています。

＜千葉雄次郎名誉教授略歴＞

朝日新聞編集総局長、東大新聞研究所長、NHK経営委員長、日本エッセイスト・クラブ会長、本学では、社会学部長、理事長を歴任されました。また、昭和47年に創設された「日本記者クラブ賞」は、先生の著書『知る権利』の出版を機会に日本記者クラブに先生が寄託された基金をもとにはじまったものです。

主著：『新聞と政治と』『マス・コミュニケーション要論』『知る権利』など。

★ 工学部分館だより ★

めざましい発展を続ける科学技術の進歩に伴い、理工系図書は基礎的文献を除けば、絶えず更新しなければならない宿命を負っています。当分館でも更新など充実に努めていますが、まだ十分ではないので、昭和60年度学習用図書の充実を重点施策として特別予算を組みました。この特別予算を有効に使用するために、工学部の専任・非常勤を問わず全教員から講義、実験などの教育に密接に関連のある図書、専門辞（事）典、便覧などの、レファレンス・ブック、その他に大学として備えるべき一般教養書を推薦してもらいました。

この推薦図書を集約し、書店に発注していましたが、夏休みすぎに9割方（694冊）納品されました。近々利用できるようにと、現在整理を急いでいるところです。

▶ 編集後記 ◀

待てば、カイロの火が消える。卒論も遅れないように、頑張ってください。

TOYO UNIVERSITY LIBRARY INFORMATION BULLETIN *KOSMOS*

1985 秋 (No. 71) 1985年10月25日発行 編集：コスモス編集委員会 発行人：大川信明 発行所：東洋大学附属図書館 東京都文京区白山5丁目28番20号 Tel. (945) 7314